

アクティブラーニングを取り入れた世界史授業

—情報機器の効果的な活用を通じて—

M15EP001

石坂 隆至

1. はじめに

現行学習指導要領では、言語活動の充実、思考力・判断力・表現力をはぐくむことを重要視している。その手立てとして、アクティブラーニング（以下AL）の有効性が取り上げられ、近年広がりを見せている。

溝上（2014：7）は、ALとは、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く、話す、発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセス¹⁾の外化を伴う。」と定義しており、小林（2015）は高校物理の授業実践の中で、具体的な方法を示しながら、学びに対する生徒の主体性の高まりや学力向上がみられることを実証し、ALの重要性を説いている。

一般に世界史（歴史）を学ぶことは、教師から与えられた解釈（＝歴史事象）を覚えること、すなわち暗記するだけと思われている。その一つの原因として、受験を意識した知識伝達型の授業が行われ続けてきたことがあげられる。現行学習指導要領に改善が示されても、従来型の授業が継続しており、改善の有効な方略とされているALの普及は、他教科と比べて世界史は進んでいないと思われる。その原因として、大学入試対策重視のために、時間の確保が難しいことに加え、ALの効果が不透明で実施する意義が見いだせず、何をしたいのかもわからないことが挙げられる。

高等学校学習指導要領解説地理歴史編世界史の目標には歴史的思考力²⁾を培うことが挙げられている。筆者は、従来型の授業に生徒が資料を解釈するALを加えることで歴史的思考力を培うことができると考えている。ま

た、ALの効果として、知識の定着に有効であるということを示すデータがある。アメリカ国立訓練研究所が発表したラーニングピラミッド（図1）によると、従来の知識伝達型授業のような受動的な学習では知識の平均定着率が低く、逆に能動的な学習ほど効果があるとしている。ALは能動的な学習であるため、知識の活用と同時に定着にも効果を発揮するものといえ、授業に取り入れることは有益であると考えられる。

小林、鈴木達、鈴木映（2015：32）では、自分が持っていた知識と関連付けて、腑に落ちるような新たな解釈や世界像が生まれる「深い学び」は、テストが終わったら忘れてしまう知識と異なり活用できる知識となっている。筆者は、世界史授業にALを取り入れることで知識の定着と「深い学び」につながるような授業を考えたい。

以上を踏まえ、本研究は、受験に必要な知識を定着させ、資料を解釈するALを両立した「深い学び」につながる授業構成とその効果を、情報機器の効果的な活用を通じて示すことを目的とする。

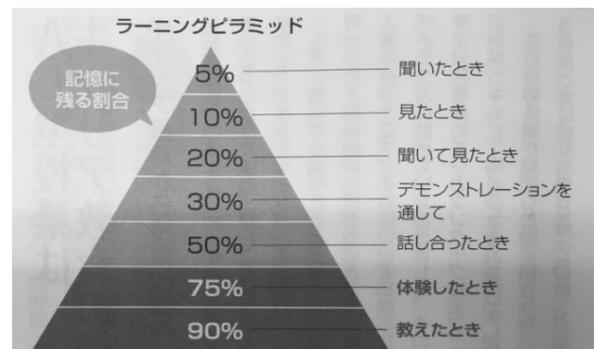


図1 ラーニングピラミッド 小林（2015：37）

2. 研究の目的

本研究の目的は、アクティブラーニングを世界史の授業に取り入れた授業設計とその効果について明らかにすることにある。

その際に、情報機器の効果的なサポート方法も検討する。

3. 研究の方法

実習校と実習方法

実習校：山梨県立 H 高等学校

実習期間：5月～11月（原則週1日）

科目：世界史B

授業時間：45分授業

対象：2年6組，3年2組，3年5組

単元：2年 イスラーム 3年 帝国主義

4. ALを組み込んだ世界史授業設計

(1) 前提条件

①基礎知識は必ず教える

進藤(2015)は、既存知識を持たない場合、知識の定着、活用はできないと述べている。世界史は高校で初めて触れる知識である生徒がほとんどである。ゆえに、ALを行う前提条件となる既存知識が欠如していることが想定されるため、最低限の知識の伝達は授業内で必須である。そのため、筆者は必ず授業の前半に知識を得る時間として、教科書を読ませ、記述させる時間と内容を補足説明する時間をとり、後半にALを行うこととした。

②生徒は世界史学習をほとんどしていない

最近の生徒は多忙な環境で生活している。学校、部活動、習い事などで多くの時間を費やしている。有限な時間の中で学習する教科の優先順位を考えると、暗記科目という位置づけの世界史は、アンケート結果(表1)にある通り家庭学習の時間はほとんどない。そのため、授業内で知識を得るだけではなく、定着しやすい工夫を加えた授業を考える。

表1

1日あたりの世界史家庭学習時間	人数(32名)
0～30分以内	14人
30～1時間以内	16人
1時間～2時間以内	2人
2時間以上～	0人

H高校3年授業前アンケート 世界史の学習時間

③情報機器の活用は校内資源の中で実施

本県の公立高校における情報機器の整備は十分とはいえない。使える資源の中で授業を考えることとし、全県に配置されているワゴンプロジェクターとパソコンを使用する。

(2) アクティブラーニングの工夫

①テーマ設定

基本的に授業の前半に学んだこと、またはそれに関連することをテーマに設定する。本時に学んだ知識を活用すれば考えが及ぶことであり、簡単すぎでは思考が深まらないと小林(2015)は述べており、生徒の実態に合わせた適切な難易度でテーマを設定する必要がある。また、生徒の思考を想定し、授業時間内で終わる内容であることを意識する。

テーマに共通していることは、資料の解釈を行うことである。地図や写真、風刺画、歴史叙述など様々な資料を用いて、事実確認のためだけではなく、解釈する媒体として資料を使用した(表2)(表3)。

表2

2年 イスラーム		
テーマ	資料	ねらい
なぜ、イスラーム教は急速に拡大したのか読み取る	クリス・ブレイジヤ『世界史の瞬間』2004 青土社 p72 (歴史叙述)	当時の状況が書かれた一文から、拡大の理由を読み取る。
写真から読み取る	ハギア＝ソフィア大聖堂内・キリスト教とイスラーム教の内装混在 (複数写真)	資料から、イスラームとキリスト教の対立が大聖堂内に表れていることに気付かせる。

資料から考えてみよう	8世紀のバグダード地図 (地図)	この地に首都を置いた理由となぜ円形都市を作ったのかを自分なりに考察する。
------------	---------------------	--------------------------------------

2年 イスラームの主な実施テーマ

表3

3年 帝国主義		
テーマ	資料	ねらい
なぜ巨大企業が誕生したか	アメリカ議会の風刺画 (風刺画)	資料から、当時の議会の様子を推測し、巨大企業が誕生した時代背景を考える。
1914年の世界地図の色分けを見て思ったこと	列強の支配地域別に色分けした地図 (世界地図)	当時の世界分割の様子をみて、特徴に気づかせる。
19世紀のイギリスの経済状況と国内の様子をデータから読み取る	19世紀の経済マクロ指標と英国債残高の対GNP比推移グラフ (複数データ)	ナポレオン戦争の結果、国債が増加したことに気付かせ、その後植民地拡大によって国民生活が改善することを読み取らせる。
19世紀のイギリス労働者の生活を想像してみよう、考えてみよう	『18世紀ロンドンの私生活』ライザ・ピカート著 田代泰子訳 東京書籍 p53 引用 (歴史叙述)	資料から労働者のおかれた状況を読み取り、社会主義者台頭の原因と結び付ける。

3年 異国主義の主な実施テーマ

②グループワークの仕方

グループの設定は、テーマ学習の目標やねらい、課題遂行に密接に関係しているため、課題に応じた人数を設定する必要がある。基本的に短時間で完結するALであるため、ペアワークか4人でのグループワークを基本として行う。その際必ず1人1回、テーマについて考えたことについて根拠を述べることと、その後、グループまたは全体で意見の共有することを徹底する。

③ルールの徹底

高校では、自分の考えを整理して述べる機会が少ない。水野(2014)がいう、学習者間の相互作用と「聴きあう、伝え合う」言語活動を重視した教授-学習法を採用している授業を「学び合い」の際に必要な要素は、「安心、安全の雰囲気づくり」であると小林(2015)は述べており、最低限のルールを徹底することは重要である。具体的には、水野(2015)があげている、意見が対立しても相手の人格は否定しない、意見の違いを恐れない、意見の根拠を示すことをルールとした。

また、グループワークの時間が、雑談の時間にならないよう、教師が時間をコントロールする必要がある。生徒の状況やテーマの難易度を考えて、ストップウォッチを活用するなどして、綿密なタイムマネジメントを行う。

(3) 具体的な授業の流れと工夫

パワーポイントによる授業を基本として、(表4)のような工夫を取り入れ、(表5)の流れで一時間の授業を行う。1時間の中で、ALも行うことを考えると、授業内容の精選と手法の見直しが必要である。授業展開を円滑にする必要があることから板書時間を削減し、理解しやすいようヴィジュアル資料を充実させる。

表4

工夫	ねらい
毎時間、授業の始めに小テスト実施	復習 (知識の定着)
教科書を読みこみ、空欄補充と小問解答	内容を読み取る (知識を得る・定着)
情報機器によるヴィジュアル資料	理解の補助 (知識を得る・定着)
本時のテーマ学習 (AL時間)	解釈(知識を活用する・得る・定着)
『本時のわかった』 (1時間のまとめ)	本時学んだこの整理 (知識の定着)
振り返り (OPPシート記入)	本時学んだことの振り返り (知識の定着)

知識を得る・定着させるための工夫

表 5

場面	時間	活動内容
導入	5分	小テスト→前時の復習→本時の学習内容周知
生徒が知識を得る	10分	各自で教科書（2ページ以内）を読み、プリントの空欄に書き込む。小問を解く（復習問題、関連した小問あり）
教師の補足説明	10分	生徒が知識を得る場面の教科書範囲の補足説明 ※ヴィジュアル資料の活用
AL = 知識活用	15分	1時間1テーマ 個人思考→ペア, グループワーク→共有
まとめ	5分	本時の『わかった』 OPPシートによる振り返り

ALを取り入れた世界史授業の流れ

①導入場面

・毎時間、前時の小テストを行う

毎回小テストを行うことで、復習するようになることが期待できる。内容が難しい、出題数が多かったりすると復習して小テストを受けようという気持ちが減退する。反対に、少し復習すれば簡単に満点がとれると意欲が増し、復習サイクルができやすくなると考えた。そのため、出題問題は基礎的なこと（簡単）であること、問題数は5問前後とした。

・小テスト用紙の活用

ワークシートとは別に小テスト用紙を作成、配布しておく（図2）。複数回分の正答率がわかるようにしておくことで、成績の推移がわかり、成績不振者に声掛けや改善を促しやすくなる。

図2小テスト用紙（表）

②生徒が知識を得る場面

・授業展開に合った授業プリントの使用

パワーポイントで授業をするため、授業の場面展開が速く進むこととなる。そのため、場面がわかりやすいように、スライドとプリント内容が一致した自作プリントを使用する。教科書内容の穴埋め（既習内容の復習問題や小問含む）、テーマ学習、『本時のわかった』の3部構成を原則とする。

スライド内容が一致した自作プリントを使用する。教科書内容の穴埋め（既習内容の復習問題や小問含む）、テーマ学習、『本時のわかった』の3部構成を原則とする。

（図3）

世界史B イスラーム編③

教科書P103～104 組 番 氏名 []

本時のテーマ：ウマイヤ朝とアッバース朝の違いを知ろう

711年 [西ゴート] 滅亡 イベリア半島征服
732年 [トゥール・ボワティエ間] の戦い
× ウマイヤ朝VS [フランク王国] ○ [カール=マルテル] 活躍

キリスト教国 教p124

西は [イベリア] 半島～東の [イングス] 川にまたがる大帝國建設 (最大領域)
国家財政の基礎 = [税] の種類
・ [ハラージュ] = 地租 ・ [ジズヤ] = 人頭税

○イスラーム帝国の形成
[コラン] = 全てのムスリムは平等※これがヒント!

ウマイヤ朝の課税システム

対象者	地租 (ハラージュ)	人頭税 (ジズヤ)
①アラブ人 (土地所有者含む)	免除	免除
②新改宗者 [マワリー]	納入	納入
③非イスラーム教徒 [ジンミー]	納入	納入

上記の表の対象者の中で、不満を持つのは①～③のうちどれか。また、それはなぜか？
【②】番 理由 全ムスリムは平等なはずなのに、税が平等ではないから
※ゆえに別名 [アラブ帝国] とも言われる

750年 [アッバース朝] 創始者 [アブ=アルアッバース]
751年 タラス河畔の戦い VS唐 [高仙芝] ※製紙法 西伝
第2代 (マンスール) 首都 [バグダード] 建設

アッバース朝の課税システム

対象者	地租 (ハラージュ)	人頭税 (ジズヤ)
①アラブ人 (土地所有者含む)	納入	免除
②新改宗者 [マワリー]	納入	免除
③非イスラーム教徒 [ジンミー]	納入	納入

・カリフの統治 = [イスラーム法 (=シャリーア)] に則った統治
・ [氏族] による差別は廃止 ※ゆえに別名 [イスラーム帝国] とも言われる

○本時のテーマ学習
[資料から考えてみよう]
2代目マンスールが造営した人工都市バグダードの地図をみて、①なぜこの地に首都を定め、②なぜ円形の首都にしたのかその理由を考えてみよう。

BC頃のバグダード (ウイキペディアより)

理由

○本時の『わかった!』(重要ポイント)
・ウマイヤ朝は [トゥール・ボワティエ間] の戦いで (フランク) 王国に敗北した。
・税制上の不平等に対して不満が多く、ウマイヤ朝から (アッバース) 朝に変わった。

図3

2年授業プリント
イスラーム編③

・プリントはわかりやすく、端的に作成

授業プリントは、教科書の太字部分（基礎）や重要ポイントを空欄にして作成する。また、カッコの形を使い分けることによってプリント内容が整理され、共通理解がはかれると共に、ポイントがわかりやすくなる（表6）。また、内容を詰め込みすぎず、隙間をとることを意識して作成する。補足説明の際、教師の説明内容を取捨選択し、自分の言葉で記述させることが重要である。表現力を培うと共に、知識の定着にも寄与できる。

表 6

カッコの種類	意味
[]	教科書の太字
()	教科書の細字
【 】	以前学習した内容

カッコの使い分け

・教科書を読みこむ

教科書は学ぶべき内容が記述されており、大学入学試験の出題範囲である。しかし、毎回授業で生徒が教科書をしっかり内容を確認しながら読む機会がほとんどない。学習内容が膨大であるため、教師が教科書内容を取捨選択し伝えている場合が多いためである。そのため、教科書をしっかり読み、太字で書かれている基礎的な知識を確認したり、その前後のつながりを確認することは、知識を得るだけではなく、より深く理解するうえで重要である。ゆえに、必ず読ませる機会を設けることとした。

③教師の補足説明の場面

・教科書を読んでわかる内容は説明しない

従来の授業は、世界史に関する知識がほとんどない状態を想定し、詳細な説明を行っていた。しかし、生徒が知識を得る場面において生徒自身が本時に学ぶ内容を教科書で確認しているため、ある程度知識を獲得した前提の説明が可能となる。すなわち、教科書に記述さ

れている内容を一から説明しなくてもよい部分が出てくる。これによって、説明時間の短縮が図られ、理解しにくい箇所の説明に時間をかけることが可能となる。

・スライドの工夫

イメージ図、動画、地図、概念図、文献資料などヴィジュアル資料を充実させたり、アニメーション機能を活用することで、動きがある授業となり印象に残りやすくなることが期待できる。また、補足説明の際、載っていない資料や情報が整理させられたスライド、復習問題や入試問題などを簡単に提示することができ、幅広い授業展開が可能になる。

④AL（知識活用）場面

・ALは1時間1テーマ完結

生徒が思考を深めることができるような適切なテーマ設定が求められる。時間配分を考えると原則1時間1テーマが適当であると考ええる。テーマは本時の授業で学んだこと、またはそれに関連することで、資料や文献について考え、ペアないしグループに分かれて学び合いを行う。

・ALの最中は机間巡視

(2)のALの工夫を実施する。その際、教師はファシリテーターとして、生徒のグループワークが促進するような声掛けをしつつ、各グループを回るとともに、生徒の気づきがねらいと合ったものになっているか確認することを心掛ける。

⑤まとめ場面

・本時の『わかった』の工夫

本時の『わかった』は最重要項目について授業プリントの最後で確認させるものである。キーワードを空欄に記入させて再度確認させることで、1時間を通じて何を学んだのか、重要な点を明確にする。

・OPPシートによる振り返りの工夫

OPPシートを活用することで、その単元に対する理解や考え方の変容をみとることができる。生徒は毎時間、新しく気づいたこと、わかったこと、感想を振り返りに書くことで、本時の学びを整理することができる。また、記述内容を確認することで、視点や考え方の変化がわかり、教師は授業の反省点や改善点もみとることができる。

5. 授業後のアンケート結果と考察

全授業終了後、授業全体の設計について、ALについて、情報機器の活用について、知識定着の工夫についてなどを、質問紙によるアンケートを実施し、その回答から分析した。

(1) 小テストは復習サイクルをつくる

授業全体を通じての記述欄に「小テストはよい。復習できるから。」「問題量がちょうどいい。」「小テストはプリントを持ち帰らせて次の授業が始まってすぐにやれば効果的。」との記述から、負担感が少なく、復習サイクルができやすくなっていることがうかがえる。

(2) 教科書を読む必要性を再認識

授業全体を通じての感想欄に「家庭学習するときもまず教科書を読むことからはじめようと思った。」との記述から、理解するうえでは教科書を読むことが効果的であると実感しており、学習方法の変化にもつながっていることが見受けられる。

(3) ALの効果を実感

(図4)の「ALを取り入れた授業のメリットは何ですか。」との質問に対し、38%の生徒が「他者の意見を聴ける。」、34%の生徒が「自分の考えが広がる。」と回答している。また、アンケート記述には、「自分の意見だけでなく他者の意見を聞いて自分の意見に生かすことができるから。」「自分にはなかった視

点や発想で物事を考えることができる。」「相手の意見を聞くことで、新しい発見や自分の意見の修正ができるから。」とあり、ALによって知識が深化したり、自己思考が修正されたことを実感しており、ALには効果があり、有効であると考えている生徒が多いと思われる。

また、(図5)の「ALを取り入れた授業のデメリットは何ですか。」との質問に対して、「デメリットがない。」を選んだ生徒が73%もあり、想像以上にALを肯定的に捉える生徒が多かった。その一方で、「間違うのを恐れてしまう。」「仲の良い人とは意見の交換がしやすいけど、そもそも自分の考えを発表するという自信はないから。あんまり話したことない人とは意見が言いにくい。」などがあり、自分の意見を述べることに慣れておらず、間違うことを恐れている生徒もいた。対策として、学び合いの前に必ず注意を喚起し、安全安心の雰囲気徹底していくことで改善できると考える。

その他の記述では、「自分の考えを相手と共有することができ、印象に残りやすいから。」「自分の言葉で話すと考えが整理される。」との記述もあり、ラーニングピラミッドで示された能動的な学習であるALは、知識の定着に効果があることが推察された。

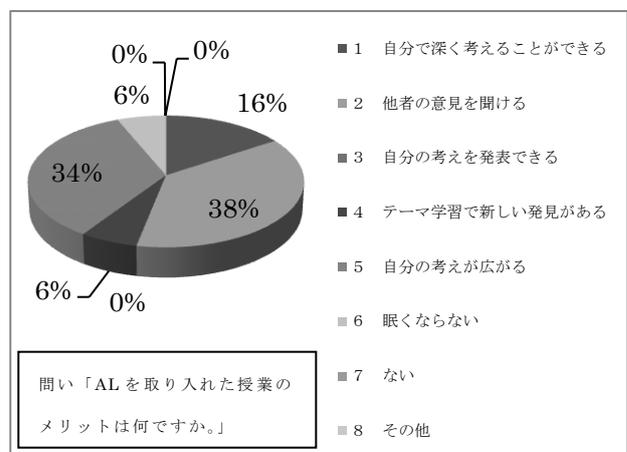


図4 ALを取り入れた授業のメリットは何ですか。

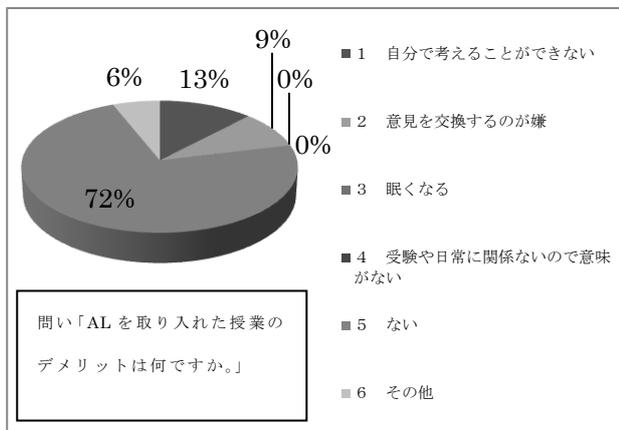


図5 ALを取り入れた授業のデメリットは何ですか。

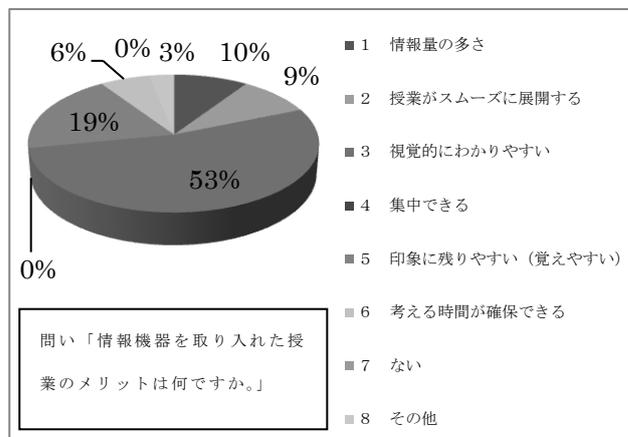


図6 情報機器を取り入れた授業のメリットは何ですか。

(4) 情報機器の活用は有効

(図6)「情報機器を取り入れた授業のメリットは何ですか。」の質問に対して、「視覚的にわかりやすい。」が53%と半数を占めた。記述には、「ヴィジュアル資料が充実しておりわかりやすい。」「映像の印象が頭に残り思い出しやすい。」「聞くだけではなく見ることで理解できた。」などの記述があり、説明内容に合った多彩なヴィジュアル資料を活用することやアニメーション効果をつけるなどの工夫をして提示することで、理解しやすくなったり、記憶に残ることに一定の効果があることが考えられる。

しかし、(図7)の「情報機器を取り入れた授業のデメリットは何ですか。」との質問では、「授業の展開が速すぎる。」が25%となっていることから、改善していく必要がある。その原因として、ALの時間確保のため板書をしないことが挙げられる。また、画面がまとまって切り替わるため、授業の展開が速いと感じる生徒が多かったのではないかと考えられる。授業内容を理解しながら、先に進むためには考える時間は必須であることから、生徒の理解度を見極めた進度調整を綿密に行う必要がある。

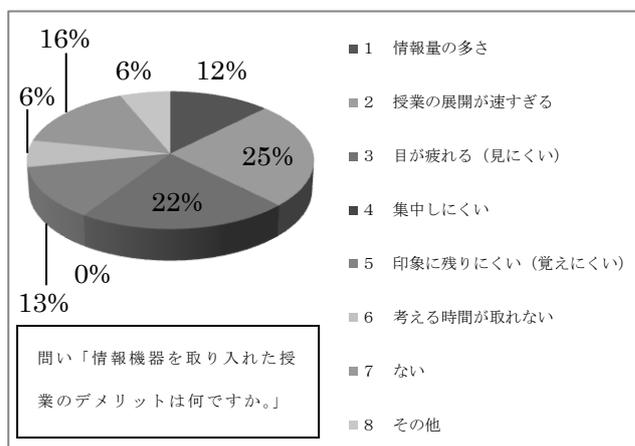


図7 情報機器を取り入れた授業のデメリットは何ですか。

その他に「授業のプリントで復習したり、勉強していたけど、いまでは資料集の図とかをよく見るようになった。」との記述があり、今までの学習スタイルを修正するきっかけとなったものもあった。様々なヴィジュアル資料を活用すると知識を定着させやすくなることを生徒が感じた結果であると考えられる。その反面、慣れてくるとテレビを見るように眺める授業に陥る危険性も考えられる。そうならないよう変化をつけた授業展開を常に心掛けていくことも大切であると考えられる。

(5) まとめの場面の充実が必要

今回の研究では、まとめの効果を実感した生徒はほとんどいなかった。OPPシートも活用したが、生徒自身が自己思考の修正を感じるような振り返りができなかつたことは課題である。しかし、生徒の記述をみると、「イスラームに対してイメージがよくない。」と記述していた生徒が「授業を通じてイスラームに対するイメージが変わった。」と変化の様子が見られた。今後はまとめ部分の充実を図れることが求められる。

6. 成果と課題

(1) ALが知識の活用と定着に役立つ

今回の研究を通じて、生徒がALの実践により歴史的思考力を醸成し「深い学び」につながっていることを実感していることが示された。

アンケートから「ただ覚えるだけでなく、考えるようになった。」や「歴史を背景や文化からみたり、一つの事柄に対して深く知らないと答えられないから深く知るようになった。」などの記述から、ただの暗記と考えられていたものが、考えることが大切と気づいたり、事象の表面をみて判断するのではなく、多面的、多角的に考察し判断することが必要と思うようになったことがうかがえた。

また、「自分で考えることで頭に残って忘れにくくなった。」「自分の考えだけでなく、他人の考えを聞くことにより、理解が深まる。他人に発表することで頭が整理される。」など知識の定着にALが役立ったとする記述が見られ、ラーニングピラミッドにあるような知識の定着効果も認められた。

その他にも、「自分とは違う歴史の解釈、学び方をもっと知りたくなった。」「自分の考えと他人の意見で視点から既に違っているのが面白かった。」などの記述から、学び合いで知識が深化したり、自己思考の修正が起きることを実感し、学習意欲向上にもつながってい

ると思われる。以上のことから、世界史授業にALを取り入れることは、学習意欲の向上、歴史的思考力を醸成すること、知識の定着に効果がある点で有益であると言える。

(2) 情報機器は授業を充実させる

情報機器の活用は、限られた時間の中で、効率的かつ厚みのある授業内容にすることや補助的に知識定着の効果を高めることなどに欠かせないものであった。しかし、授業内での活用方法については再検討の余地がある。今後より効果的な活用方法を検討していくこととする。

(3) 今後の課題

今回の研究を発展させるために、継続した実践の中でALが学力向上に有効であるかについて検証していく必要がある。また、ALのテーマ設定について、どのようなテーマ設定が「深い学び」に繋がるのか考察していきたい。その際、具体的な評価の仕方についても考えていくことが今後の課題である。

注1) 認知プロセス・・・知覚・記憶・言語・思考といった心的表象としての情報処理プロセス

注2) 歴史的思考力・・・歴史学習を通じて培われる思考力

7. 参考引用文献

- ・小林昭文 教員研修プログラム アクティブラーニング型授業～実践編～河合塾千種校実施(2014. 8.16)。
- ・小林昭文(2015)『アクティブラーニング入門』-アクティブラーニングが授業と生徒を変える- 産業能率大学出版部。
- ・小林昭文, 鈴木達哉, 鈴木映司(2015)『現場ですぐ使えるアクティブラーニング実践』 産業能率大学出版部。
- ・水野正朗(2014) 対話にもとづいた知識の共同構築を促進する教授・学習過程-高等学校における「学び合い」の授業づくり- 金城学院大学論集, 社会科学編 10(2) pp. 136-149。
- ・溝上慎一(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂。
- ・産業能率大学 入試企画部(2014) 第8回キャリア教育推進フォーラム報告書 学習意欲を高め学力向上につなげる授業改革。
- ・進藤聡彦(2015) 山梨大学教職大学院 授業創造の心理学 授業資料より。